

平成二十八年九月一日発行（第二十六卷第九号）通巻第（一〇）号（毎月二回）日発行
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

槐 かい

平成28年9月号

岡井省二創刊



冥途の飛脚

高橋将夫

齒にしみて心にしみて岩清水
夏暖簾風が開いてくれにけり
夜振火に闇がぐるりと巻きつきぬ
片蔭に入つて熱い息を吐く

白日傘さして火宅を出たる人
冥途への飛脚の落し文かとも
緑陰に探してをりし己が影
列島を西へ動かす夏怒涛
夏の川紙飛行機が着水す
どちらからともなく歩み寄る鹿の子
遠花火もうひと花もふた花も

槐安集

水野恒彦

海見ゆる果てに立ちて秋の声

化野に置き忘れあり秋扇

蹻音が大地に沈む秋夕焼

寝転びて真砂がぬくし天の川

天馬いまわ太虚に遊び桃冷す

九月二十三日省二忌

加藤みき

これほどの淡竹筍如何にせむ

はらはらと人が崩るる熱砂かな

玫瑰のとげとげの先晴れ渡る

炎昼や爪に天性現れて

かはほりや太閤の闇出発す

中島陽華

捨や桃の花咲く目出度さに

ふつつかなアダムなりけり薔薇の湯に

山門の袖に湯屋あり花は葉に

コルク栓スポンと抜けて五月富士

高島屋発白南風のオープンカー

竹内悦子

養生は鮫の軟骨日雷

種なしの西瓜の艶の佳かりけり

紫陽花の呪文かかりし烏骨鶏

ほんたうは眠りたくない含差草

大徳寺納豆ひとつ夏祭



雨村敏子

これよりは第四楽章祭笛
蠟穴の無音なりける息づかひ
形代の流れとなりし瀬音かな
カサブランカに白き魔性のありにけり
まん中に闇かたまりし螢池

本多俊子

六月の岩すべりゆく水の色
もの思ふ紫陽花の毬遠く置き
夏の星ひつそりとある石舞台
天啓を称へて泰山木の花
蝸牛と考へごとをしてをりぬ

近藤喜子

紫陽花を眼裏にまだ海でゐる
とうすみや水辺やさしきものを生む
白南風や五臓六腑に日の匂ひ
瞼とぢ涙を捨つる眠り草
水となり螢を待つてをりにけり

瀬川公馨

夏の雲達磨大師は渡来人
難攻不落の石堀のぼる夏蓬
日のある方に頭ぐるぐるきりん草
ローランギャロスにじつと動かぬ入道雲
夏の夜のグランドオペラ火星人

久保東海司

蛤の眼覚め口より泡を吐く
事ここに至りて浅蜷蓋ひらく
会釈に応ふ僧の合掌竹の秋
泳ぎ疲れ流れにまかすみづすまし
囀りや無口の男うとまれて

柳川 晋

魂の入れ物めきし蠅捕器
不条理を囓んで含める百足虫かな
千年の時が脱ぎたる蛇の皮
自由律に傾いてゆく青葉木菟
此の國が無くならぬやう蛇籠編む

熊川 暁子

彩を消し匂ひは秘めて五月闇
尺蠖は余命を測ることもする
世の中へぼとりと落ちし線香花火
終の田は没日待たせて植ゑられし
若葉風禰宜の本音の人臭き

寺田 すす江

火星接近
火星人見ゆるか朱夏の煌めきに
十葉の生真面目すぎし寡黙なり
原点は食べることなり蛞蝓
紫陽花や静かに昼の雨の降る
梅雨じめり金属疲労起こしをり

岩下芳子

親燕虚空自在に操りぬ
恥らひの淡き色なる新生姜
金色の梅雨満月の雫かな
水無月や火星に水のありどころ
ぬらぬらと土用鰻の肝つ玉

近藤紀子

パプリカの真つ赤一つの気を籠に
軍手干す麦熟るる日の匂ひかな
茅花抜き甘き湿りをくちびるに
葉桜の下慕はしき暗さかな
夜の代田にほつほつとも暮らしの燈

岩月優美子

半夏生草ふはとオペラ座の怪人
星涼し水上に聞くカンツオーネ
罪とは何真紅の薔薇に触れてみる
雨の日の鬱裏返す四葩かな
地動説疑ひもせず蝦墓眠る

竹中一花

出世魚淡竹の皿に添へらるる
水漕の息はんぎきの眠りかな
あめんぼの宴五条の橋の下
祝檀二十五周年
大日や鹿の子大きく立ち上る
檜の風茅の輪くぐりの背を押せり

前田美恵子

光りつつ緑一色隠岐の島
夏の潮高速艇の風となる
茴香や思はぬとこに落し穴
砲台の眠りは永き夏野かな
七十路や何に向き合ふ青蛙

中田禎子

良に毘沙門天やパリー祭
風のかゝるに天地人あり沙羅の花
石塔の乾きはじめし青蜥蜴
南天の花恐竜の足跡よ
ニュータウンに残る古池牛蛙



槐市集

有松洋子

太初より蛇は女が好きである
梅雨の嬰水の匂ひに笑まひをり
梅雨深しみな黒傘の黒服の
薄き影重ね重なり四葩咲く
詩よつねに逆光に立つ新樹たれ

庄司久美子

眠り草校長囲む昼休み
百日紅東司にならぶ下駄二足
雨上りの日差しの届く蟻の国
小節聞かせる歌姫や土用東風
乾電池のプラスマイナス油照

中西厚子

自転車を鳩の先導街薄暑
宝石を鑑定する眼梅雨寒し
雲梯にぶら下がりをる夏の蝶
視界から消ゆる夏月うるう秒
外寝人自由の中の不自由さ

橋本順子

鱧釣りや白き砂紋の続きをる
物音に蜥蜴消えける野面積
藻を入るる金魚の色の鮮やかに
四角にも壺にもはまる蛸の形
山法師シスターに会ふ山の中



平野多聞

復興のみちのくの夏山車軌む
裸の子雲の峰まで逆上り
手綱引く鶴匠の光るピアスかな
雲の峰息子は航空自衛隊
I・Sは此岸の生みし灸花

藤田美耶子

大夕焼子がらす一羽遅れけり
夏の川一両電車軌み行く
軍配の団扇あふげり大相撲
紫陽花に心の鍵をかくしけり
ポピーの野童話にひそむ残酷さ

安野眞澄

六月の風に吹かれて良き便り
一病は息災なりし茅の輪かな
万緑や水面に映る空青し
風蘭の風は見へねど匂ひ来し
湯の町の宿の下駄履き踊の輪

柳橋繁子

古九谷の青き香合苔の花
山羊ひげの音楽教師アマリリス
鹿の子群れ渡る大路や赤信号
指先の白き包帯半夏生
指きりの先に咲きたる蛇莓

山田佳子

胡坐の子長き脛なり櫛若葉
音立てて矢車まはる夜更かな
万緑の山二つ越へ戻りたる
ヘッドホン手に六月の美術館
白シャツの少女の群れの息吹かな

吉田順子

星流る恋しきものを追ふやうに
夏つばめ一閃宙を裏返し
紅うつぎ咲く深みより水の音
点滅の点に螢のこころかな
日輪に向きのぼりゆく立葵

槐集

高橋将夫選

金魚ひらり猫の目線をかはしけり
竹原 久保 夢女

人間の皮窮屈で更衣

大揚羽悪鬼羅刹までみとれ

方舟の乗船切符梅雨ざんざ

大夕焼人のみ明日を約束す

荒梅雨や龍の都へ招かれて
大阪 有松 洋子

かたつむり殻には蒼き湖を入れ

声変りしてより無口子の夏よ

深井戸に光揺れゐる桜桃忌

園といふ異郷に獣夕焼ける

火星近づく炎帝の客として
岡崎 犬塚李里子

天牛の鳴くこゑ遠き昼の闇

蔓薔薇の闇に匂へる遠き恋

夕迫る淵の上なる濃あぢざぬ

逆さまに現し世の青映す水

短夜や眠れぬ夜の長きこと
大阪 江島 照美

踊子草ピエロは愛を語りけり

空蟬や見えぬからこそ見ゆるもの

建前で生きてはいけぬ桜桃忌

女郎蜘蛛一糸にかける命かな

海境より立ち上りたる夏の雲
岡崎 吉田 順子

夏薊野辺のふところ深くする

白といふ夢のはじまり沙羅の花

紫陽花や起伏ゆたかに水の音

動かざる夜の雲あり遠河鹿

青蘆原命はぐくみ光りをり
柴田 靖子

揚羽蝶ふときて幻影描きゆき

水鏡して紫陽花のほこらしや

突と蛇我見し眼いつまでも

ハンモック未来の夢の玉手箱

銀河往来

高橋将夫

◆槐集観照

大夕焼人のみ明日を約束す 久保 夢女

全てのものには魂が宿り、全ての生き物は生きる知恵を身に着けている。しかし、遠い未来を考えるのは霊長類でも人間たけだろう。チンパンジーは明日の約束をしない。軽妙に進化の本質に迫っている。当たり前のことを当たり前として看過せず、そこに真理を見ることが大切と思ふ。

〈人間の皮窮屈で更衣〉の句、人には自我があるが、魂のようから自らの身体から抜け出ることではできない。脳は自由に瞑想し、時には頭蓋の外に出たくなる。更衣でもすれば、少しは自分が変わった気分になれそう。そんな事を考えさせる一句。

〈大揚羽悪鬼羅刹までみとれ〉の句は大揚羽の本質に迫っている。〈金魚ひらり猫の目線をかはしけり〉の句、金魚に軽くあしらわれた猫のくやしそうな顔が目には浮かぶ。

深井戸に光揺れぬる桜桃忌 有松 洋子

桜桃忌は太宰治の忌日。太宰治といえは「人間失格」。深い井戸の底に揺れている光は太宰治の数奇な運命の象徴なのだろう。

〈園といふ異郷に獣夕焼ける〉は動物園という異郷で獣がたそがれている景。近ごろ絶滅危惧種が心配されているが、この句は人の世にも通じるものがある。

〈声変りしてより無口子の夏よ〉の句とへかたつむり般には蒼き湖を入れ〉の句はそれぞれ、男の子と蝸牛の本質を捉えている。蝸牛はアンモナイトの海にまで遡るのだ。

〈荒梅雨や龍の都へ招かれて〉は「龍の都へ」の発想が新鮮。

逆さま現し世の青映す水 犬塚李里子

「富士を映す湖」といった句はごまんとある。しかし、掲句が映しているのは「現し世」である。「遠離一切顛倒夢想」は般若心経の一節。逆さまの姿に惑わされないよう心したいものだ。〈火星近づく炎帝の客として〉の句は発想がユニーク。〈天牛の鳴くこ糸遠き昼の闇〉と〈蔓薔薇の闇に匂へる遠き恋〉の句、どちらも遙かなものへの憧憬を感じさせる。

短夜や眠れぬ夜の長きこと 江島 照美

歳時記によると「夏は夜が短く、暑さで寝苦しいのでたちまち朝になってしまふ。明けやすい夜を惜しむ心は、ことに後朝（きぬぎぬ）の歌として古来詠まれてきた」とある。それでも、眠れぬ夜はやはり長いのだ。

〈踊子草ヒエロは愛を語りけり〉と〈女郎蜘蛛一糸にかける命かな〉の句には物語がありそう。〈空蠟や見えぬからこそ見ゆるもの〉の句は芒原を渡る風を思わせる。

白といふ夢のはじまり沙羅の花 吉田 順子

「夢のはじまりの白」と沙羅の花がよく照応している。〈海境より立ち上りたる夏の雲〉は雄大。

揚羽蝶ふときて幻影描きゆき 柴田 靖子

揚羽蝶が舞う様子を「幻影を描く」と捉えた作者の感性に共鳴した。揚羽蝶の本質に迫っている。

祝されてげんのしようこの花押かな 中 貞子

慶事の花押でめでたい。「げんのしようこの花押」は今この時の証でもあるのだ。

〈以下略〉